

日本映画学会会報

第53号 (2018年3月27日)

The Japan Society for Cinema Studies (JSCS) Newsletter

発行・編集 日本映画学会 (会長 山本佳樹) / 編集長 小川順子

事務局 信州大学人文学部 杉野健太郎研究室内 〒390-8621 長野県松本市旭 3-1-1

事務局メールアドレス japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp

学会公式サイト <http://jscs.h.kyoto-u.ac.jp/> 学会公式ブログ <http://jscs.exblog.jp/>

目次

学会誌『映画研究』第12号の編集を終えて 板倉史明 2

新入会員自己紹介 自己紹介 後藤慧 5

出版紹介／新入会員紹介 7

● 学会誌『映画研究』第 12 号の編集を終えて

板倉史明（学会誌編集委員長、神戸大学大学院国際文化学研究科准教授）

本年度の日本映画学会の学会誌『映画研究』第 12 号（2017 年発行）における編集委員会の編集過程の報告をいたします。今回、学会事務局に計 13 編の投稿があり、編集委員会による厳正な査読の結果、3 編が掲載となりました（昨年度は計 11 編の投稿で 3 本の掲載でした）。

今回の審査について、編集委員会での協議の上、前年度から若干の変更を加えましたので、審査プロセスを以下に解説します。投稿された論文について、編集委員長を含む計 6 名の編集委員が、査読を担当する論文を議論で決定し、期日までに査読結果を編集委員長に提出します（査読者に論文の執筆者名は知らされません）。各論文に対して査読者は必ず複数名います（通常は 2 名）。

（1）査読者は以下に示す A から D の 4 段階で論文を評価します（各評価に対応する点数を（ ）内に記します）。

A：ほぼそのまま掲載できる（4 点）

B：若干の修正を施せば掲載できる（3 点）

C：抜本的な修正を必要とする（2 点）

D：掲載できない。（1 点）

（2）編集委員長が各評価を集計し、以下の基準にしたがって査読結果の原案を編集委員会に提案します。

・2 名の査読者の点数が 4 点+4 点、4 点+3 点、3 点+3 点の場合→掲載

・2 名の査読者の点数が 4 点+2 点、4 点+1 点、3 点+2 点、3 点+1 点、2 点+2 点の場合→編集委員会で議論したうえで掲載か、再審査か、掲載不可かを判断。

・2名の査読者の点数が2点+1点、1点+1点の場合→掲載不可

(3)上記のプロセスで査読結果を確定させ、学会事務局に報告します。学会事務局は、各投稿者に査読結果を査読コメントとともに通知します。その後、掲載が決定した論文執筆者は、査読コメントを参照しながら入稿用の最終版原稿の作成をおこないます。リ
ライト期間は1ヵ月ほどあります。

(4)再査読になった論文の審査は、担当した査読委員（通常は2名）と、編集委員長あるいは副編集委員長のいずれか1名（編集委員長と副編集委員長が協議のうえ決定）の、計3名によって審査（コメント付きで、採択か不採択かの二択で評価）し、多数決で採否を決定します。

今回13本の論文中、1本が掲載可（「改稿のうえ掲載」）、4本が再審査、8本が掲載不可となりました。そして再審査となった4本の論文のうち、2本が掲載となりました。このようなプロセスで、今回3本の論文が掲載されることになりました。

その後、掲載が決定した3本の論文に対して、第10回（2017年度）日本映画学会賞を授与するかどうかの選考を行いました。日本映画学会賞とは、学会誌『映画研究』投稿論文のなかで「傑出した学問的成果を示した論文」に与えられる賞です。選考のプロセスは以下の通りです。まず3本の掲載予定論文のなかから「最優秀論文」を選びます。全編集委員の投票によって、掲載予定論文のなかかでもっとも優れた論文を、相対評価で1本選びます（こちらも匿名審査ですので、各論文の執筆者は伏せられたまま審議されます）。その結果、「玩具映画の受容における視覚性と触覚性——チャンバラ映画分析からのアプローチ」が4票、「黒澤明『八月の狂詩曲』の対位法にみる和解と狂気の技法——原爆映画史における聖母マリアの修辞の文脈から」が2票となり、最優秀論文は「玩具映画の受容における視覚性と触覚性——チャンバラ映画分析からのアプローチ」と決定しました。最後に、「最優秀論文」に対して第10回（2017年度）日本映画学会賞を授与するかどうかの判断を編集委員で行いました。「授与してもよい」か、「授与しない」か、のいずれかを各編集委員が判断し、多数決によって決定します（同数の場合は編集委員会で審議します）。その結果、「授与してもよい」が0票、「授与しない」が6票となり、残念ながら今回の日本映画学会賞も該当論文なしということになりました。

以上が審査プロセスについての報告でした。掲載された3本の論文はそれぞれ先行研究をしっかりと踏まえたうえで、オリジナリティのある論点を設定し、堅実で充実した議論を展開しているものばかりです。もちろん非の打ち所のない論文というのはまれで、掲載された論文のなかにも議論の展開や論証にいくつかの弱い部分があったことは確かです。ただし編集委員会における協議の末、論文全体が学術論文としての一定の基準に達していれば、最終的に掲載にいたると言えます。学術論文としての一定の基準をクリアした論文を研究者間で共有することによって、それらに対する批判も含めて映画学の議論が蓄積され、映画研究コミュニティのさらなる発展につながることを重要だと考えています。

本『映画研究』第12号をもって、今期の編集委員会は解散となり、次期の編集委員会が次号の編集を担当することになります。学会員のみなさまの積極的な投稿のおかげで、毎号レベルの高い論文を掲載することができました。引き続き、学会員のみなさまからの投稿をお待ちしております。学会誌の編集プロセスについては、よりよいものにするために毎回改善してまいりましたが、まだ不十分な点もあるかもしれません。みなさまからのご意見をお待ちしております。最後に、2年間ご多忙のなかご協力いただきました編集委員のみなさまと事務局のみなさまに心より御礼を申し上げます。

●新入会員自己紹介

自己紹介

後藤 慧（一橋大学言語社会研究科修士課程）

日本映画学会の皆様、初めまして。現在、一橋大学大学院言語社会研究科修士課程に所属しております、後藤慧（さとし）と申します。プロモーションビデオやドキュメンタリーなど、映像制作もゆくりと行っていますが、今回は本分である研究の概要について簡潔に説明させていただきます。このような機会を設けてくださったことに大変感謝いたします。

現在私は、主にビクトル・エリセ(1940-)というスペインの映画監督について、「映画とスペクタクル」という視座から、研究しております。エリセは、10年に一度しか長編を制作しないような、寡作な作家として有名です。彼がこれまでに制作した長編映画は『ミツバチのささやき』(1973)、『エル・スール』(1982)、そして『マルメロの陽光』(1992)の3本のみです。私は、『マルメロの陽光』以降のエリセ作品に、特に関心を持っています。また、その他の、あまり知られていない短編や中編も、重要な研究素材となると考えております。一般的に歴史的契機であるとされている社会的出来事に関して、エリセのスタンスはささやかです。出来事を直接、大々的にイメージ化することはしません。しかし、一方で、とても意識的でもあるのです。

『ミツバチのささやき』はスペインのフランコ政権末期に作られた映画です。検閲の関係もあり、この映画においては、隠喩が頻繁に用いられていました。政権や内戦に対する批判的メッセージは、家族の物語に置き換えられ、ほのめかされます。このやり口は、長編2作目の『エル・スール』においても引き継がれている、といえるでしょう。

『マルメロの陽光』以降、エリセは、違った歩行をみせていると考えます。この作品は、画家が西洋カリンの木を描く過程を映像にする一方、湾岸戦争や東西ドイツ統一などの情報を、ラジオニュースとして伝えます。あるシーンでは、ラジオの音声としてのテロと、正面からマルメロの木を映したイメージがモンタージュされるのです。スペクタクルとして消費されてしまう可能性を孕んだ社会的出来事は、イメージとしての権利を剥奪され、音声にされています。その傍ら、何でもないはずの果物の木が、イメージとして強調されていくのです。もっとも、音声化は、スペクタクルの抹消である、と安直にいえぬことは確かです。作品内における音声とイメージの複合的関係は、今後注視すべき課題です。また、この作品では、増殖するTVのイメージが、夜のマドリッドの街並みとして映されます。さらに、カメラが孤立して自動運動するさまを映す事により、映画自体が、TVと同様にスペクタクル生産の装置であることを、自己言及するのです。自己スペクタクル化を回避できない映画と、それでもなお、ささやかな生をイメージ化するエリセが浮上します。

また、短編『ライフライン』(2002)では、1940年のスペインの村で、日常生活や、生命の誕生がイメージとして連なる一方、パン粉をこねるための下敷きとなった新聞はナチスの記事を伝えます。出来事のスペクタクル性について、より直接的に言及しているのが、

東日本大震災に関する短編『アナ、3分』(2011)です。『ミツバチのささやき』の主演であった、アナ・トレントが、ソポクレスのアンティゴネ上演を前に、大震災についての所見を、カメラに語りかけるという映画です。そこで、当時の報道の様子について、「ビデオクリップみたい」と言及するセリフがあります。中編『割れたガラス』(2012)は、ポルトガルの閉鎖されたガラス工場についての映画です。この作品は、労働者の、かつての工場労働についてのインタビューが基盤となっています。そんな中、「いまはすべて仮想、仕事は仮想、インターネットだ」といった、スペクタクル化が進行した世界に関するセリフが出てきます。以上の例から判明するように、エリセは、映画におけるスペクタクルについてとても敏感な作家だ、といえるでしょう。

私は、ギイ・ドゥボール(1931-1994)が『スペクタクルの社会』(1967)で投げかけた問題意識は、あいまいにされ、いまだ浮遊していると考えます。映画は映画である限りスペクタクルをもたらします。スペクタクルは資本の運動に他ならず、映画をそこから切り離すことは困難です。ドゥボールは、自身も映像作家でありながら、映画自体に否定的でしたが、エリセはそうではないでしょう。

日本の映画作家でも、たとえば佐藤真(1957-2007)は、カストロフを直接的に描かないドキュメンタリーを制作しており、映画の自己スペクタクル化に対する意識も、エリセとの共通項として確認することが可能です。このようなスペクタクルに対する映画の抵抗、それも自己スペクタクル化を意識した抵抗のあり方を、いずれは横断的に探りたいです。まずは、エリセ作品の綿密な分析を、引き続き行っていづもりです。今のところ、このような未熟な概観となっており大変恐縮ですが、様々な交流の場を通じて、皆様のご指導ご鞭撻を頂戴できれば幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

● 出版情報

- 北村匡平会員／木下千花会員 北村匡平・志村三代子編『リメイク映画の想像力』、水声社、2017年12月。
- 木下千花会員／杉野健太郎会員 アメリカ学会編『アメリカ文化事典』、丸善出版、2018年1月。
- 小原文衛会員／塚田幸光会員／土屋陽子会員 森有礼／小原文衛編『路と異界の英語圏文学』、大阪教育図書、2018年1月。
- 須藤健太郎会員 エリー・フォール『エリー・フォール映画論集 1920-1937』、須藤健太郎編訳、ソリス書店、2018年2月。
- 佐藤元状会員 佐藤元状『グレアム・グリーン ある映画的人生』、慶應義塾大学出版会、2018年3月。
- 伊藤章『アメリカ演劇とその伝統』、英宝社、2017年10月。（会員外恵贈）
- 武田悠一『アレゴリーで読むアメリカ／文学——ジェンダーとゴシックの修辞学』、春風社、2017年12月。（会員外恵贈）
- 矢橋透『ヌーヴェル・ヴァーグの世界劇場——映画作家たちはいかに演劇を通して映画を再生したか』、フィルムアート社、2018年2月。（会員外恵贈）

● 新入会員紹介

- 徐 玉（大阪大学大学院修士課程）現代超域文化論／日本映画におけるジェンダー表象
- 符 子薇（大阪大学言語文化研究科研究生）映画とジェンダー
- 孫 宇（大阪大学言語文化研究科研究生）ドキュメンタリー研究
- 田 雨時（関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科修士課程）日本映画論
- 脇本忍（聖泉大学人間学部准教授）社会心理学
- 東 志保（大阪大学文学研究科助教）クリス・マルケル研究／ヨーロッパの記録映画の研究
- 青砥吉隆（日本大学商学部非常勤講師）アメリカ研究（20世紀社会と文化、歴史）、ハリウッド映画分析
- 山口敦子（長崎純心大学人文学部教授）イギリス・アイルランド映画